

---

# 狐の面は月見て笑う

柚葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狐の面は月見て笑う

### 【Nコード】

N3360Z

### 【作者名】

柚葉

### 【あらすじ】

義賊…金持ちから金品などを盗み、貧民に与える賊。

義賊グループ「月夜」に所属する氷美は自分と紅い色が嫌いだった。理由は、戦うとやりすぎてしまうから。やりすぎたときの色が、紅だから…

少し血の表現がありますのでご注意を。

＊連載始めました。冷やし中華っぽい言い方ですね…；

## プロローグ

氷美<sup>ひみ</sup>は狐の面の下で笑った。

月光が降り注ぐ中、紅く染まった刀を振って。

紅葉色の地に、花のような紋が入っている着物。刀のように紅く染まったのが目立たないように。

でも氷美は、この着物が好きではなかった。  
なぜか。

やりすぎてしまったことを自覚させる色。

氷美の嫌いな、紅。

知らない人は「殺人鬼」と。

知っている人は「義賊」と。

氷美たちは、そう言われる。

氷美は、やりすぎてしまうから。手加減ができないから。

氷美は、紅く染まってしまうのだ。

そして、氷美は。

紅く染まった自分の顔を見たくないからこそ、狐の面をかぶる。

恐れられることを恐れているから、やりすぎてしまう。

どうすればいいのかわからないから、操り人形のように、刀を振るうのだ。

## ?. 制御?

氷美は義賊。

(義賊…金持ちから金品を盗んで貧民に与える賊。)

だが、氷美は単独で義賊の活動をしているわけではない。

5人のグループ、「月夜<sup>げつや</sup>」。

「あーあ、派手にやったな、氷美。」

氷美の背よりも50?ほど高い塀を軽々と越えて来たジャージ姿の少年が苦笑した。

「…零<sup>れい</sup>。」

零と呼ばれた少年も、「月夜」の一人。

氷美よりも一歳だけ年上で、それだけなのに威張るといふのがものすごくいらつくやつだ。

「氷美もさ、やりすぎないようにできないわけ?」

「できたら、とっくの昔にやってるわよ…。」

喋るのは久しぶりな気がした。日本刀を使っているときは、時間が長く感じられるのだ。

感じられるだけじゃないのかもしれないけれど、もう慣れた。

「どうでもいいけど、零。」

「あい?」

「私がやりすぎるのを、黙ってみていたというの?」

氷美は、自分がやりすぎること、誰かにとめられないと相手の息の根が止まるまで戦うことを知っている。

もちろん零も、知っているはずなのに。

「あ、いやー…それは、さ…。」

「黙ってみてたんでしょ?」

やりすぎてしまう自分が、大嫌いだった。

だからやりすぎそうなきはとめてくれと、月夜の全員に言った。

「……………悪い。」

ややあって、零が頭を下げた。彼曰く、氷美のやりすぎたときの強さがとめるほどのものなのか品定めしたらしい。

「……………」

「…氷美？」

「ふっざけんじゃないわよ！」

「ちょ、氷美！仕事！騒ぐとばれる！」

「あんたが悪いのよ、零。」

「だから、悪かったって！」

「悪かったですむ話じゃないのよバカ！」

「じゃあどうしろってんだよ！」

「そんなの私を知るわけないでしょ！」

「私、帰る。零一人でやって。」

「え、ちょ、氷美！？」

零が後ろで呼び止める声がする。

知ったことか。あいつが悪いんだ。そう腹立ち紛れに思う。

氷美は日本刀を持ち、いつの間にか落としていた狐の面を拾う。

「少し、汚れた……。」

自分で言って、吐き気がした。

その紅い汚れは、氷美がやりすぎてしまった証拠となる。

氷美は、どこで道を間違えたのか。

あの、孤児だった頃から間違えてたというのならば。

氷美は一つため息をつき、知ったことか、と心の中でもう一度呟いた。

## ?. 制御?

少し腹が立ったまま、氷美は門の出口へと向かう。

悔しいが、零のように塀を飛び越えることはできないのだ。

仕事は明日実行することになる。

「…や、氷美って!」

後ろからまだ零の声が聞こえる。

「待てっつってんじゃん!」

しつこいなあと氷美は思った。自分のせいだから必死で追いつけよ。

「このっ…やりすぎ女!」

ぶちっ

「好きでやりすぎてるわけじゃねーよ!」

やりすぎ女だと?

こっちだってやりすぎて後悔してるんだよその後悔のネタを一つ増やしたのもお前が原因だろうがそれなのにお前がそう言うこと言う権利があるのか!?

「や、だっってお前がとまんねーんじゃん!」

「お前と話す気ないんだよ。あんた一人で仕事やれば?は、どうせ私はやりすぎますよ、やりすぎる私は不要ですと?じゃあおまえ一人でやってみればいいじゃん。ちゃんとできるんならね!」

「いや、そこまで言っていないんだけど。」

「私にとってはそれと同じなんだよ!」

零は落ち着きまくっている。それがまたいらつく。

そうやって零とのケンカに氷美は集中しすぎた。

「…誰か、いるの…?」

## ?. 制御?

零と氷美とで取っ組み合った状態のまま、おそろおそろ声がした方を見た。

「そこにいるの、だれ…?」

6歳ぐらいの、少女。

「…零!」

「おい!なぜそこで俺に矛先が向くんだよ!?!」

「もとをたどればあんたのせいじゃないのよ!」

2人は心なしか顔が青い。

そりゃそうだ。

義賊なのに完全に見られたとならば失格。

しかもさらに、それは自分たちのケンカのせいとか言ったらもう終わり。

義賊グループ「月夜」の名折れ…………。

「ど、泥棒!?!」

彼女の声が恐れ of せいで小さいことが幸いだっただが。

「泥棒なんでしょ!う、家のお金は、盗んじゃダメよっ!」

そう言うなり、足下に落ちていた木の枝を拾って闇雲に振り回しながら襲いかかって(?)きた。

「出ていってよっ!」

「な—————」

急にそんなことをされると思っていなかった氷美は、避けるのが遅れた。

「やああっ!」

少女が叫び、振り下ろした枝が、氷美の頬をかすめる。

「つつ……………」

鋭い痛みが走り、そこから血があふれた。

小さい傷だったが、氷見の目に映ったのは。

嫌いな、紅。

だめだ————また、やりすぎてしまう。



## ?. 制御? 零 side

氷美は無言で日本刀を抜いた。

—————やばい。

零は直感でそう判断する。

とめなければ……………!

「なん、だよ…!」

足うごかねえし。怖いのかよ!

「零」

氷美が、静かに呼ぶ。

さっき零とケンカしていたときの声とはぜんぜん違っていた。

「邪魔、しないで。」

冷ややかな声。背筋が凍るような。

氷美を傷つけた少女は、その様子を見てふるえていた。

木の棒を手が白くなるほど強く握り締めて。

「あ…あ、」

声にならない声を出していた。

そりゃ怖いよなあ、と零は冷静に分析してしまう。

だって、俺だって怖いもん。

「氷美、今度こそ止めねえと俺殺されるよな…。」

俺、まだ死にたくねえよ?

零の思考がそこまで達したとき、氷美が日本刀を構えて走り出した!

「うげっ」

零は慌てて追いかける。

氷美は、やりすぎたことをひどく根に持ち、下手したら自分の命を差し出しても罪を償おうとする。

当たり前といっちゃ当たり前のことだが、こんな幼い少女を。自分の体験したことをさせるとなれば。

氷美は—————

「やめろっ、氷美！」

零は、追いつけなかった。

紅い、血が、舞う。

零はそれを見たくなくて、固く目をつぶった。だけど。

血が舞う音の変わりに。

きい—————ん

と、金属音がした。

「……氷美？」

おそろおそろ目を開けると。

長身の人が素手で氷美の刀を押さえている。

それを片手ですませ、もう片方の手で速やかに少女の首に手刀をたたき込んだ。

黒のコートに、首の後ろで結わえた夜空色の髪が揺れる。

「…なっ、朔さん!？」

その人は糸目を面白そうにさらに細めて言った。

「零くん?とめなかったのなら、お仕置きだよ?」

「ウソだろ…。」

この朔という青年、「月夜」のリーダーであった。

## ?. 制御? 零 side

「さ、朔さん？お仕置きって何するんすか。」

零は死にたくないという思いが強まったあまり、氷美のことを放ってそのことを聞く。

氣を失った少女を木陰に置くと、朔は困ったように眉を寄せた。

「君ね、もう少し氷美のことを考えてあげないの？」

「…ふっ、死にたくないのは誰でも当たり前でしょう。」

無意味にカッコつけてみる。

ちなみに、朔はまだ氷美の剣を押さえつけている状態。

その状態でよく話せるなあと心の片隅で思ったのはおいとくとして。

「…氷美、どうするんですか？」

「ん、どうするって？」

さっきから氷美は動かない。

朔を睨みつけているように見えるが、いつもの氷美ならそんなことしないし。

やりすぎる状態では自分を失っている…そんな感じだと零は勝手に予想した。

「剣そのままじゃないすか。」

「ああ、それ？氣を失わせた方がいいかねえ？」

知るか。

なんか朔のこういう態度がいらつく。

零は自分の指が無意識に動いてしまったのを見ないことにした。

零は鋼糸こうし（糸型の剣みたいなもの）を使って戦う。

右手の中指が動くのは、本気になった零が「片づけ」をするときの仕草。

いや、今動いたのは左の中指。

だったら大丈夫だ。それに今は鋼糸を身につけていない。身につけていたところで朔を倒せるわけでもないが。

「あ、零くん。今僕に殺気をむけたね？」

だってこの人は、どんなにうすい殺気でも気付いてしまう。

「気のせいでしょう。」

「君が言った気のせいが本当に気のせいであつたことがないけどね。」

長くて理解しにくいセリフだったから、零は聞き流した。

「じゃ、ごめんね？氷美。」

朔は剣をむけてくる氷美の鳩尾に拳を入れた。

かわいそ。

たぶんこれは、朔のお仕置きである。

いつもなら朔は首筋に手刀をたたき込むだけで気を失わせるが。

鳩尾なら、痛みとか…たまに吐き気を感じたりもする。

え、じゃあ俺つてもっとひどいお仕置きさせられるの？

やばい。

考えただけで気が遠くなった。

「零くん？」

「…はい。」

朔は何を考えてるのかなあという笑顔で聞いてくる。

表情がわかりやすくて怖い。

「いーえ、なんでもないです！」

「じゃ、ここの仕事は近いうちにやるということで。」

「は？え、なに、帰るんすか。」

「当たり前。君も氷美も、しつけ直したほうが良さそうだしね？」

零は無言で朔の後に続いた。

こういうことがあるから、この人は月夜のリーダーになれたんだと思う。

## ?. 制御? 零 side

月夜の人達が暮らしている所は、築五十年のぼろいアパートだった。もう誰も使っていない、廃墟のようなものだ。

「あれ、他の2人はどこいったんすか？」

不思議に思った零が朔に聞く。無視されたが。

狭い部屋の中に、人がいる気配がしない。

零は首を傾げてふと上を向き————

「うわあっ!？」

思わず鋼糸を「天井に張り付いていた人」の首に巻き付けようとした。

力任せに糸を引っ張る。

「————あつぶないわね……その変な反射神経どうにかしなさいよ。」

しかし、鋼糸には何もかかっておらず、零の隣に小柄な少女が降り立った。

「変なってなんだよ、まったく……。なんで天井に張り付いてんだよ、萌黄。」

萌黄と呼ばれた少女は、なぜか偉そうに胸を張る。

「ふんっ、誰か来た気配がしたから隙があったら後ろから襲おうと思ったのよ!」

天井にいたら、後ろというより上だと思う。

それに、足震えてんじゃん。

彼女は年齢不詳だが、見た目は十歳程度。

怖かったんじゃないかなあと見てみるが、言うのはよしておいた。短気だから、抹殺されかねない。

「おや萌黄。起きていたのかい？」

「ふざけないで朔。私がねるわけないでしょ……ふあ……」  
あくびでてんじゃん。

萌黄は、朔を呼び捨てにでき、タメ口で話せるというある意味超人であった。

「で、零。あなたはうちの氷美に何をしたのかしら？」  
急に凄みのある笑顔が迫ってきた。

「えや、なにも？」

うん、俺は何もしていない。

鳩尾に拳をたたき込んだのは朔だ。

「……………あつそ。」

納得したのかよくわからない萌黄の反応。

後で朔がやったとばらそうか。

そう考えた零だったが、その「ばらした後」のことを考えて冷や汗をかいた。

きつと、朔に半殺しにされるに違いない！

賭けてもいい。絶対当たるから。

「氷美……………かわいそうに。早く目覚めてね…？」

萌黄が気を失っている氷美に顔を近づける。

「何する気だテメエ——————！！？」

十、<sup>プラス</sup>彼女はレズビアン——つまり、同姓に好意を抱くのであった。

「うるさいわね…私と氷美の仲を邪魔しないでちょうだい。」

「うるせーよ！なんでよりにもよって氷美！？」

「氷美は日本刀を持つ戦う美少女よ。可愛すぎるわ！」

「あんた何歳だよ！？」

零と萌黄の口論が続く中、朔がぼんやりと呟いた。

「零くんは、氷美が好きなんだっけ？」

「……………は？」

哑然とした零に追い打ちをかけるように萌黄が騒ぐ。

「きゃー図星だ！かわいいう〜♪でも氷美はあげないわよ？」

「意味わかんねーし！朔さん、そういうこというのマジでやめてく

ださい！」

はははと朔が頬をかく。

ぜってえおもしろがってやがる。

「：私がどうしたって？」

騒ぎすぎていた。

さすがにうるさかったようで。

氷美が、目覚めた。

## ?. 制御?

「朔さん。」

氷美は起きてすぐに、朔に伝えたいことを言おうとした。だが、肩が重い。

「萌黄…。」

なぜかという、萌黄が寄りかかっているからである。

「なんだ、氷美？」

にこにこ笑顔で萌黄が聞いてきた。

彼女に好かれているようで、氷美にとっては妹ができたみたいだ。

「今は大切な話があるから待っててね？」

苦笑を浮かべて萌黄に訴える。

「…氷美は私を何歳だと思っているんだ…？」

ぶつぶつ言いつつ、萌黄は氷美の肩から離れた。

「で、なんだい？」

朔が氷美に問いかける。

危ない。忘れるところだった。

言いにくいこと…大きく息を吸い込む。

「…言わないよね？」

朔が、氷美の心をのぞいたかのように言った。

はっと顔を上げると、朔の糸目が普通の人のように開いている。

なんというか…似合わない。

「まさか引退したいなんて、言わないよね？ていうか、君に言えることじゃないと思うんだけど。」

朔はそう続けた。

ばれている。私の考えなんて。

「…でも、ダメなんです。」

氷美は小さく返した。

私じゃダメなんだ。やりすぎてしまう私じゃ、月夜のバランスがと



れない。

零の鋼糸だって、糸型だが刃の部分とみねの部分とがあり、本気に  
ならないと刃の部分を使わない。

だから、彼は人を殺すことが滅多にないのだ。

萌黄は薬を使う。

睡眠薬、身体が麻痺する薬……すべて自分で開発していた。

もしもの事態ということは、ない………はずだ。

朔は体術、もう一人は極度の引きこもりで情報屋。

人を殺してしまうのは、氷美だけなのだ。

その氷美だけのせいで、月夜全体が悪く言われる。

そんなの、他の四人に悪いだろう。

だから、氷美は。

「……………さい。」

「ん？」

小さくて聞こえなかったように見せかけているが、朔は凄みがあり、  
少し寂しげな笑顔を浮かべている。

わかっているだろうに。

私はダメなんだと。

義賊にはなれないのだと。

ずっと成りゆきを見ていた零と萌黄がまさかと目を瞠る。

「月夜を、やめさせてください。」

仕方ない。

やりすぎてしまうのは、制御できないんだ。

## ?. 秘密、過去?

「…やっぱり、そうなのかい?」

朔は困ったように眉をひそめた。

その視線を受けきれなくて、氷美はうつむく。

「…仕方ないじゃないですか…」

私がいるせいで、月夜はダメになってしまっただし。

「氷美：私が嫌いか?」

萌黄が泣きそうな声を上げる。

「いや、そういう問題じゃないんだけど。」

萌黄は好きだ。

年下なんだか年上なんだかわからない態度が可愛い。

「じゃあなんでやめるとか言い出すんだよ!」

一番反応が遅かった零。

一番反応が遅かったけれど、一番焦っている気がする。

「やりすぎてしまうのは、悪いことじゃないんだよ? 氷美。」

朔が優しく諭した。

でも、悪いことじゃないというならばなんだというんだ。

「悪いことです。だって私がいたら、月夜が悪く言われる…」

「そんなの気にしなければいい!」

零が怒ったように叫んだ。

「零…」

「月夜が悪く言われようと、氷美は悪くねえだろ!? 悪いのは不浄の金を使ってる相手なんだし!」

確かに、零は間違っただけとは言っていない。

萌黄も隣で頷いている。

でも、それじゃあ氷美の気持ちが収まらない。

「でもさ、零。」

「なんだよ?」

「私は、みんなに迷惑をかけてると思うんだわ。」

「はぁ！？そんなの、」

「どうしても良くないんだよ、私には。」

零の言葉を遮るように、氷美は強い口調で言った。

零が黙りこくって、誰もひと言も発さない。

気まずい沈黙が流れる中、ピピピピッと緊張感のない音が響いた。

「おっと、鴉からすからメールだ。」

朔が銀色の味気ない携帯を開き、うすく笑った。

「あそこの屋敷の人に気付かれた。警備を厳重にするらしいって。」

「あそこって…さっきの。」

零が思い出すように呟く。

朔は頷き、チラリと氷美に目をやりながら話した。

「でも氷美はこうなってるし、君たち2人で行ってくれるかい？」

2人といわれた萌黄、零は顔を見合わせる。

勝負を挑むかのように笑い合々と、立ち上がった。

「行くぞ、萌黄。」

「ふんっ、私が戦いに出るとは、まことに久しぶりだな。」

「いってらっしゃい。」

朔がにこやかに送り出し、2人は窓から飛び降りて屋敷に向かった。話について行けずにいた氷美は、ぼんやりと思ったことを聞いてみた。

「鴉さんって…性別、どっちです？」

そんな氷美に朔は、相変わらず笑ったまま答えた。

「うん、不明だね。」

リーダーが知らぬのならば、知る人はいないだろう。

ちなみに鴉は極度の引きこもりで、戦うことはしない月夜の情報屋であった。

？. 秘密、過去？のオマケかもしれない。

「夜分遅くにすみません。」

玄関の方で、手はず通りにセリフを言う萌黄の声が聞こえる。

月夜の中では姐さんの存在なのに、こういう風に言っているとおしとやかなお嬢様に思えるから不思議だ。

「ん、なんだお前は。」

門番らしい声。

すると萌黄はオドオドしたように言う。

「あの、この方に用事があったのですが…。」

「…今夜はお嬢様が特に怯えていらっしゃるんだ。ご主人様も相手にしてくれないだろう。」

門番は少し毒気を抜かれたようだったが、萌黄のことをかたくなに拒む。

零は木の上からその様子を見ているのだが、萌黄の変化がよおっくわかった。

「ちっ、めんどくさい奴め。貴重な薬剤をこんな序盤で使わせるな。」

低い声でそういうと、手のひらサイズ（萌黄の手のひらだから結構小さい）の小瓶を取り出し、振りまいた。

…振りまいた？

えっ、もしかして俺被害者？

振りまくとか危なさ過ぎる。

慌てて袖で口元を覆った。

萌黄は、そのままだが。

「…ふう。」

萌黄がため息をつき、門番が倒れる。

それからきっかり30秒数えて、零は口元から手を離した。

萌黄はそんな零を見、鼻で笑った。

「ふんっ、これくらいの睡眠薬、なれておかねば私と共闘などできんぞ？ 零。」

「……………や、萌黄。お前大丈夫なん？」

「…お前、馬鹿なのか？ 薬を扱うものが少量の薬で気を失ってどうする。」

…少量なんだ。

零は返す言葉が見つからなくなり、沈黙した。

「ところで零。」

「あ？」

「中で、どうするつもりだ？」

「…気を失わせりゃいいだろ。」

「鋼糸でできるのか？」

「峰の方で縛ればいいんじゃない？」

「気を失いはしないだろう？」

「そこはお前に任せるさ。」

そこら辺が、萌黄といて便利なところだと思う。

「自分勝手だな、零。」

「無理なもんは無理なんだよっ。」

あ、今思い出した。

騒いだらまた見つかるし。

てか、朔さん警備を厳重にしたとか言っていなかったっけ？

「おい！ 今こっちで声がしたぞ！」

「チームF、標的を確認した。」

見知らぬ（当たり前）おじさんたちの声が飛び交う。  
しかもなんか連絡取り合ってねえ？

「逃げるぞ萌黄！」

「は？ 仕事はどうするつもりだ零！？」

「いいから！ 見つかるよりマシだろ！？」  
意味なし。

逃げるときも騒ぎながらだし。

もしかしたら氷美のときよりもやばいかもしれないなあーなんて。

「零！口と鼻と耳をふさげ！」

口と鼻と耳！？

「無理だろ馬鹿！俺の手は二本だ！！」

「こっちじゃねえか！？」

「逃げ足の速い奴らめ…！」

警備員の人達とおいかけてこの始まり。

後ろでさらに萌黄がいろいろと喋ってるので、ばれやすくなった。

零がツツコミをいちいちするせいかもしれないが、そこは零の性格なので仕方ない。

後日。

『体力のつきたい方、おすすめですよ！』

なーんて見出しであるサイトの記事となった。

走り回る零たちの姿が、黒く影になって映っていたりして。

その記事を作った人は、黒い鳥の名を持つあの人だった。

## ？. 秘密、過去？

ほんとは、辞めるなんて嫌だ。

氷美はくちびるをかみしめた。

そもそも氷美は孤児で、拾ってくれたのが月夜だったんだし。

辞めるなんて言ったら、氷美はまた一人になる。

自分の気持ちなんて、我慢しなければいけないことだ。

月夜は、私がいると仕事がちやんとできなくなる。

しつこいようだが、氷美はそれが嫌で仕方なかった。

「氷美。何時までも自分だけで悩むなよ？」

朔が言う。

「だけど、たとえ打ち明けたからといって、やりすぎがなおる訳じゃないんですし。」

「……ひねくれてんだね、君。」

「…は。」

自嘲気味な笑みを浮かべた氷美は、脇に置いてあった日本刀――

―氷美の愛刀・雪鶴ゆきづるを朔に差し出した。

「…氷美？」

「これ、もとは朔さんのものですよね。」

「まあ、ねえ。」

「…お返しします。私には、これを握る権利がないので。」

氷美はそう言って朔を見上げた。

長身な彼には、座っていても見上げなければ顔が見えないときがある。

「…………困った奴だね、雪鶴。」

朔は氷美ではなく、雪鶴に話しかけた。

「そう、そうなんだよ雪鶴！わかってくれると思ってた！――

え？や、まさか！厄介者だなんて思ってたないよ？雪鶴は綺麗だからね――」

朔はそのまま雪鶴と話しているかのように喋る。

なんか朔が冷や汗をかいているように見えるのは気のせい？

「具現化すればいいのに。めんどくさいとか言わずにさあ…ね？雪鶴」

氷美はめまいがした。

朔が変人に見えて仕方ない。

「…えーっと、朔さん？雪鶴…どうしたんですか？」

『どうしようも何もあるか。我が話しているのが聞こえぬか？』

ふと、なんか声が聞こえた。

「……………」

『そなた、我がずっとパートナーとしていたのに話していたのを知らぬのか！？』

「……………朔さん？」

氷美はのろのろと顔を上げた。

「うん、雪鶴だよ？」

にこやかに頷く朔。

刀って、動物だっただろうか。

『むう…今は聞こえているようじゃが、我は無視されておるのか？朔。』

雪鶴(?)が朔に話しかける。

朔は少しも動揺せず、雪鶴と会話していたというのか？

「いや、まだちゃんと事態が飲み込めていないだけだよ。」

『そうか。なら良かったが…氷美は、我をなんだと思っていたのじゃ？』

少し憤慨したように言う雪鶴。

氷美はそれについて即答した。

「日本刀。」

『…ま、間違っではないのじゃが…即答されると少し傷つくのう。



』  
ふむ。

落ち着いて聞いてみると、雪鶴の声はなんとなく萌黄と同年（？）の少女の声と思えた。

言葉がやけに古めかしいが。

「てかさ、雪鶴。刀ってしゃべれるの？」

『……妖霊でもあるまいし……日本刀がしゃべるわけなからう』

「……じゃああんたは何。」

『……我は、この刀を作った職人らしいのじゃ。』

……職人？

「女？」

『そうだな。』

「ますます意味がわからない。」

『うーむ……そうじゃな。』

「うん。」

『我にもよくわからんのじゃ。』

「意味なっ！」

『し、失礼じゃな！我は具現化すればこんなに綺麗だというに！』

「……こんなに？」

氷美が首を傾げた。

瞬間、日本刀の形が水色っぽい淡い光を放ちながら、人型になっていく。

水色の光がだんだん弱まり、氷美はまじまじと目をこらした。

「これが、我だ。」

「……雪鶴？」

そこには藍色の髪に水色の大きな瞳を持った白っぽい着物の少女が偉そうにたっていた。

?. 秘密、過去? (後書き)

なんかサブタイトルと関係なくなってきた気がしますね!

## ?. 秘密、過去?

「…誰?」

「…今我と話していたではないか!なぜ1秒で忘れる!?!」

その少女は顔を少し紅潮させて叫んだ。

まさかとは思うけど。

「雪鶴!?!」

「遅ーい!?!」

雪鶴のツツコミが入った。

「だってわからないもん!人型になるとかあり得ないしっ!?!」

「しゃべり方とか外見とかでわかるじゃろう!?!1秒で忘れられたのは初めてじゃ!」

「知らないわよそんなこと!言ってくれないとわかるわけないでしょ!?!」

「言わなくても話の流れ的にそうなる!そんなことも察することができんのか!?!」

「はあ!?!できなかったらなんだって言うのよ!?!」

「そんなに馬鹿だとは思わなかったわ!?!」

全力でにらみあう氷美たち。

朔は目を丸くして(?),くすくすと笑い始めた。

「何がおかしいっ!?!」

2人から怒られて、さらに笑う。

「朔、お前!?!斬りたいか!?!」

「…やつ、ごめんごめん。ほんと。」

「朔さん?」

「氷美、こいつ斬ってかまわんか?」

「…うー…あんまり良くないかも。」

「ちよっと氷美!?!ちよっと良くないって何!?!」

危うく斬られそうになった朔は、笑うのをすぐさま辞める。

「「さて、訳を聞かせてもらおうか？」」

氷美と雪鶴の声がハモった。

朔は。

誰かを怖いと思ったのは久しぶりだった。

「いや、氷美がね？」

「…私？」

「うん。義姉あねにそっくりで。」

「…朔さんに、義姉なんていたんですか？」

朔についての話は、何も知らない。

萌黄も喋らないし、零は氷美と同じで知らない。

朔だって自ら喋ろうとしたのははじめてだった。

「うーん、まあね。」

「…氷奈のことか？」

雪鶴が静かに言った。

「氷奈？って…だれ？」

「…やっぱり氷美は覚えてないかー…」

朔が残念そうに笑う。

雪鶴が鼻で笑うが、話しについて行けない氷美は怒れなかった。

「氷奈義姉さんはね、君の、母親だよ。氷美」

「私の、母親…？」

自分の中にない記憶。

母の記憶なんて、知らない。

しかも、なんで朔が知ってるの？

困惑した顔を朔に向けると、朔は感情を読み取れない笑顔を浮かべていた。

?. 秘密、過去? (後書き)

もういいもん!

サブタイトル変えてやりました↑

## ?. 秘密、過去？

「なんで、朔さんが知ってるんですか。」

「だーかーらー、義姉だっていつてんじゃない。」

朔が笑う。

なんか、悔しいんだ。

氷美は自分の母のことを覚えていないのに、朔は知っている。そのことがやけに悔しい。

ふと、氷美は思った。

「あり、てことは朔さんって…」

「うん。」

「私の叔父に当たる人お!？」

「うん、そうだねえ。」

……………。

「信じたくないっ!!!!!」

悔しい上に、自分の叔父だなんて。

朔のとなりで雪鶴が嘆息した。

「落착着け、氷美。」

「…雪鶴？」

「悔しくなったところで、朔の記憶は消えないさ。」

「…もしかしてさ。」

「ん？」

「本当にもしかしてだけどさ。」

「なんだ？」

「雪鶴も、母さんのこと知ってるの?」

雪鶴は沈黙する。

何も言わない雪鶴を見て、氷美は悟った。

「知ってるんだ。」

「…なぜわかるっ!？」

態度でわかるでしょ、そりゃあ。

「朔さんが知ってるのは少し腹立たしいけど…」

「ええっ!? なんで? 雪鶴はいいの?」

氷美がいったことに、朔は悲痛な声を上げる。

笑うのをこらえて氷美は続けた。

「雪鶴なら、いいや。」

「…なんでだ、氷美。」

雪鶴が無表情で問うた。

「だってさ、母さんも使ってたんでしょ。雪鶴の、パートナーだったんでしょ?」

氷美の言葉を聞いて、雪鶴がふっと微笑む。

「氷美は、すごいな。」

「…正解ってことね?」

「そ。氷奈は君みたいな人だったよ、氷美。性格も、全部。悲しみから復活した朔が言う。」

「私、みたい。」

日本刀——雪鶴を使っていて、性格も似ていて。

「…暴走もした?」

「……………」

朔と雪鶴がそろって氷美から目をそらした。

「…母さん…」

自分も同じだけど、少し呆れた。

「うん、だからな氷美。」

「雪鶴?」

「お前が同じように暴走したとき、そんなところまで似なくてもって思ったぞ?」

「……似ちゃったよ、母さん。」

母も苦笑しているだろう。

「あ、でも…。」

「ん?」

「私の中に、なんで母さんの記憶がないんだろ…」

雪鶴を見て眩くと、雪鶴は少し目を伏せた。

朔も険しい顔つきになる。

「…？」

「氷美、過去の話をしていいか？」

雪鶴の深刻そうな問いにとまどいつつ氷美は頷く。

「少し、つらいかもしれないけど。」

朔がそういった。

「つらい…？」

「そうだ。お前は3歳ぐらいのときだったしな。」

「…3歳って。」

微妙な年だが、少しぐらい覚えていてもいい年だと思うのに。

覚えてないということは、それなりに何かあったのだろう。

氷美は一人、息を飲んだ。



**\*雪鶴語り〔過去〕\* (前書き)**

雪鶴が語る (?) 氷美の母の時代です。誰が誰だか、わかりますか？

## \*雪鶴語り〔過去〕\*

「まあ、姫宮様！？木に登るなんて危なすぎます！降りてください。」

「姫宮は下から見上げてくる侍女に笑いかけた。」

「いやだ！」

「嫌だではございません！もし怪我などしたらどうするのですか！？」

「けがなどしてもこうかいはないぞ、わたしは。ここからみえるけしきはきれいだから。」

何を言っても動じない姫宮に、侍女はため息をつく。

「その気は庭にある中で一番高いのですよ！？」

「————麗音。落ち着きなさい。」

麗音と呼ばれた侍女は、はっと振り返った。

そこにいるのは物静かそうな女性。

木の上にいた姫宮は、慌てて飛び降りた。

「かあさま！」

「姫宮？危ないじゃないの。そんなに綺麗な景色だったの？」

「そうなの！だけど、さっきかられいねがうるさくて。」

嫌そうに顔をしかめる姫宮。

姫宮の母————氷奈という名である————は、困ったように眉を寄せると、人差し指を一本たてた。

「そんなことをいってはいけないわ、姫宮。麗音だってあなたが怪我をして痛い泣くと、おろおろして自分も泣きそうになるのよ？だからよけいな心配をかけてはいけないの。」

「ちょ、氷奈！？ばらさないでっていったのにつ。」

後ろで麗音が慌てている。

姫宮は不思議そうな目でそれを見、氷奈に向き直った。

「うん、わかったよかあさま。——ねえかあさま、どうしてれいね

はかあさまのことをふつうによぶの？わたしにはけいごをつかうのに。」

もったもな疑問だ。

「…そうねえ…麗音は、私が大変なときに支えてくれた大切な友達なのよ。麗音にはあなたより一つ年上の男の子がいるわ。今度会わせてもらいましょうね。」

「ほんと！？やったあ！！」

麗音は何度か口を開閉したものの、なんていえばいいかわからずがつくりと肩を落とした。

「かあさまもおからだがよわいんだからむりしちゃだめだよ？」  
なんの脈絡もなくそういう風に注意されて、氷奈は微苦笑を浮かべる。

ふと、そんな様子を見ていた麗音は自分の斜め後ろに人の気配を感じ、武器である鋼糸を装備した。

その人は、振り返った麗音にチラリと一度だけ視線をよこすと、すぐにふいっと顔をそらす。

「…氷奈、この人…だれ？」

「麗音。どうでもいいけれど人を指さすのは辞めなさい指さすのは。」

氷奈が呆れている。

それがかんに障った麗音は、震える手を下ろした。

「私の、弟よ。」

氷奈が答える。

「…弟お！？」

「うるさいわね麗音ったら…。」

「…すいませんでしたー…。」

氷奈の弟(?)であるその人に目を向けると、どこもかしこも似ていなかった。

「義理の弟よ。」

「先に言えー！！」

「あいかわらずツツコミ体質なのね、麗音…。」

「……初めまして。朔と、います。」

その少年、朔は軽く会釈した。

人見知りなんだろうか。

「ちなみに、二十歳よ。」

「どうだっていいわ!」

ふざけて麗音をおもちゃにしていた氷奈は、不意に顔を真面目にしていた。

「…月夜の、次期リーダーよ。」

「……はあ、月夜の。」

月夜の次期リーダー。

…リーダー?

「はあっ!？」

「…麗音…。」

「月夜って、あれですよねあの。」

「そうよ。」

「旦那様の、義賊グループ。」

「ええ。まったくその通りよ。」

もとをたどれば、氷奈も麗音も月夜の一人だった。

日本刀と、鋼糸を扱う、とても気が合っていて仕事はいつもこの2人、といったかんじの。

氷奈はどこをどう間違えたのか、リーダーである弓弦と結婚し、貴族の端くれのような生活をしている。

旦那様というのは、弓弦のことだ。

麗音はその侍女。

その、弓弦の弟がこれらしい。

朔…新月のことだ。

弓弦が弓のような形をした月だとすると、結構近いなあと思う。

「ええ、やってあげましょう。月夜のリーダーだろうとなんだらうとどんな奴が来ようと手なずけて見せますよもうヤケですけどそれ

がなんですか開き直って何が悪いんです!!」

朔が急に饒舌になり、開き直って話し始める。

麗音は、若干引いた。

「はいはい、落ち着きなさい朔。後で弓弦に人の手なずけ方とか教えてもらえばいいわ。」

そういう風に簡単に言うのもどうかと思う。

「ははうえー!」

急に後ろから大好きな声が聞こえてきた。

息子の、零。

麗音は振り返る。

「ははうえ、しごとおわった?」

「零! ごめんね、まだなんだけど…姫宮様と遊べると思うわ。」

「ひめみやさま? だれ? なんていうこ?」

「ふふ、氷美ちゃんよ。仲良くしてやって?」

「ひみ? うん、わかった。ひみ、あそぼう?」

零が姫宮の顔を覗き込む。

だけど、姫宮は安らかな寝息を立てながら夢を見ていた。

「…あれー? ははうえ、ひみ、ねちゃってるよ?」

「え、そうなの?」

予想外だ。

さっきからなんか静かだなーとは思っていたけど寝ていたなんて。

「ごめんなさいね、若君。」

氷奈が笑いながら謝る。

「わかぎみ? おれのこと?」

零は可愛らしく首を傾げた。

「そうよ、零。可愛い若君様。」

「だめだよ! おれ、かつこよくなつてひみをまもるんだ!」

「あら、これはまた。」

姫宮の耳元で騒いでいたせいで、姫宮が目をつつすらと開ける。

「ううーん…だあれ…?」

「あつ、ひみ、おきたの？」

「だあれ？」

「れいだよ。はうえのところにきて、ひみとあそぼうとおもったんだけどねちゃってたんだもん。」

「れいねのこどもなの？れいって、おんなじはつおんね。」

「うん、おれね、おおきくなったらひみをまもるんだ！」

「そうなの？じゃあわたしはどうすればいいの？」

「うーん、ひみはねー……………」

そんな、子供たちの平和な会話を聞いていて、氷奈と麗音は顔を見合わせて笑った。

朔もクスリと笑う。

笑われてきょとんとしていた子供たちも、つられて笑い出す。  
今だけの、平和な時間だった。

**\*雪鶴語り〔過去〕\* (後書き)**

長めですが、さらに2つぐらいあるかもしれないです！

**\*雪鶴語り「過去？」\* (前書き)**

少し残酷っぽい表現がありますので、注意してください (＞|＜)



## \*雪鶴語り「過去？」\*

麗音が、息子の零と一緒に長期休みをもらって旅行に行っていた間にその出来事が起きた。

姫宮が、氷奈とかくれんぼをしていて隠れた場所で眠っていたときにその出来事が起きた。

朔が、弓弦の元に行こうと思って家に向かっているときにその出来事が起きた。

氷奈が、いい加減かくれんぼをしている姫宮に降参しようと思っていたときにその出来事が起きた。

誰も、予測しなかった出来事だった。

：姫宮がふっと目を開けると、あたりにはある色が広がっていた。左右どちらにも、その色があつて。

姫宮は何が起きたかわからなかった。

「：あかい、いろ：」

赤とはまた違う、少し色が濃くなったような色だった。

呼び方は同じだけれど、何か違う。

これに似ている色は、なんだろう。

考えた姫宮は、自分の頬を流れている液体に手を触れた。

そう、この色だ。

血の色の、紅。

：朔は、その光景に瞠目した。

真っ白で綺麗だと思っていた屋敷。

いつも姫宮の声が聞こえてきた明るい屋敷。

今はしんとして、ほのかに紅く染まっているところがある。

なんだろう、これは。

この光景は。

朔はふらふらとよろけるようにして屋敷に入った。

鉄のにおいが鼻をさす。

視界に映るのは、紅の色。

それを見て理解した朔は、声にならない叫びをあげた。  
嘘だ。

どうして。

どうして――

どうして、氷奈が紅く染まっているのか。

…氷奈の身体に、もう感覚はなかった。

後ろから唐突に訪れた鋭い痛みにも、氷奈は声を上げることさえかな  
わなかった。

神経が傷ついたのか、動くこともできない。

意識はまだある。

考えるのは、自分の娘のこと。

氷美は、無事だっただろうか。

隠れたままなら、大丈夫だと思うのだが。

なにしろ、子供は妙に聡いところがあるから。

氷奈はそっと微笑んだが、顔の筋肉も動かない。

微笑んだのを見たものは、誰もいないだろう。

襲ってきたのは、月夜の獲物だった人達だろうか。

どうやって調べたのか知らないが、月夜のメンバーがここに集まる。

そのことを知って、襲いに来たのだろうか。

馬鹿だな、と思う。

そんなことをするぐらいなら、不浄の金を使わなきゃいいだけの話  
なのに。

「ちっ、こいつ綺麗な顔だったのによお…」

やけに悔しそうな声が聞こえる。  
うん、怒ったよ？

あんたたちのグループがやったんだろう？  
なのにそこで悔しがるとか馬鹿の極みだね？

「だから最後は、俺がやってやるよ。」

悔しがっていたそいつは、大きな斧を取り出した。  
ぶん、と風が唸る音が聞こえ。

氷奈は、意識をなくした。

：麗音は、自分の目が疲れているんだと思った。  
いや、思いたかった。

親友の顔はもう見えない。

こんなことになるなら、旅行なんて行くべきじゃなかった。

無理矢理にでも誘えば良かった。

零が呆然とその場に座り込む。

いくら幼いとはいえ、4歳だ。

何が起きたかぐらいはわかってしまったのだろう。

麗音は、泣いた。

ただ、泣いた。

他にどうしろと言うんだ。

今までずっと、麗音は泣かなかった。

足を骨折したときだって、泣かなかった。

特に氷奈の前では、泣こうとしなかった。

なぜか意地を張って、絶対に泣くものかとずっと我慢してきた涙が、  
今あふれ出してきたかのように。

「っ……ひなあ……っ……ひなあ……！」

ただ繰り返し、氷奈の名を呼んで。

麗音は、氷奈の亡骸を抱きしめた。

朔、麗音、零の3人は、氷奈の有様を見て言葉をなくした。ふと周りを見渡した朔は、一人いないことに気付く。

「…氷美は…？」

「…いな、かった。」

朔の問いかけに、零が泣きそうな声で答えた。

「おれ、さがしたんだ。でも…いなかった。どこにも…」

「…零…」

氷美はまだ3歳だ。

見逃してくれたというのならば、不幸中の幸い。

でも、零はいないという。

氷美は、どこに行ったのだろう。

「…麗音さん、兄さんがどこにいるか、わかりますか。」

「…弓弦…？」

麗音の声は頼りない。

親友が死んだのだ、無理もない。

ショックから立ち直るのは、そう簡単なものでもない。

「俺を探してんのか？朔。」

「…兄さん。」

後ろから唐突に現れた弓弦に、朔はいらつきを覚えた。

「氷奈が亡くなったというのに、なんでそう平気でいられるんだ！」

「！」

思いのままに叫ぶと、弓弦に思いっきりシバかれた。

「だっ」

「馬鹿者。麗音がいる前でそれを言うか？」

はっとして麗音の顔を伺うと、大丈夫、というように微笑まれた。嘘だと言うことは誰が見てもわかる。

「…すいません。」

「俺だって平気じゃねえんだよ。」

どうやらものすごく失礼な物言いをしたようだ。

「で、氷美だがな。」

「…はい。」

弓弦が真面目な顔になる。

零も麗音も朔も、緊張の面持ちで聞いた。

「氷美は、連れて行かれた。」

最悪の事態。

「そういう顔すんな。氷奈は雪鶴に氷美を任せたみたいだからな。いざとなったら雪鶴が守るさ。」

「でもっ…!!」

「待て。重要なのはこっちじゃない。」

声を上げかけた朔を、険しい顔で弓弦が制した。

さらに嫌なことがあるというのか。

「氷美は、記憶をなくした。」

**\*雪鶴語り〔過去?〕\* (前書き)**

投稿がしばらくできていませんでした。ごめんなさいっ！

## \*雪鶴語り「過去？」\*

「…記憶を、失った…？」

麗音のぼんやりした声が、やけに大きく響いた。

誰も一言も発することができずにいたからかもしれない。

「そうだ。あまりにも、キツイ光景だったからな。」

弓弦の苦々しい声。

麗音はキツと顔を上げて立ち上がり、弓弦の頬を張り飛ばした。

いい音がした。

「な、…お前…」

弓弦が呆然とする。

弓弦はこれでも、月夜のリーダーだ。

麗音はその部下らしき存在であり、弓弦も張り飛ばされたことなんてなかった。

でも、それはただの言い訳になる。

「何普通に言ってるのよ！あんたがもうちょっと早くあの屋敷に来ていたら、誰も死ななくても、氷美だってさらわれなくてもすんでいたじゃない！キツイ光景にさせたのも、あんたが遅れてきたからでしょ！？全部、あんたのせいだわ！！」

メチャクチャにまくしたてられた言葉に、弓弦は反論しなかった。勢いできたもう一発の平手も、避けなかった。

自分に、それを受けなければいけない責任があったから。

「…悪かった。」

その一言で、麗音には十分だった。

麗音はその場にくずおれる。

わかっている。

すべての責任が弓弦にあるわけではないのだと。

弓弦だって、好きでそうやった訳じゃない。

弓弦だって、麗音のように周りに当たってこの気持ちをまき散らし

たかった。

平和な日々は、いつまでも続くものじゃないのだと。  
この光景が、物語っていた。

「…おれ、さがしに行く。」

また静まりかえった中で、零は呟くように言った。

幼い心で、決意したあのことを、守れなかった。

『ひみをまもるんだ!』

悔しさ。零の感情はそれ一つ。

自分の非力さに腹が立つ。

「零…」

朔がためらいがちに声をかけた。

「さくにいちゃん、とめないでよ。」

「…止めるに決まってるだろう!」

「だめなんだ!」

零は自分に言うように叫んだ。

「だめなんだ。ここでおれがいかないと、おれはいっしょうひみを  
まもれなくなる。…そんな、気がする。」

弓弦がふっと笑う気配がする。

なんか馬鹿にされた気がして、零は弓弦を正面から見た。

目が合う。

「おれは、なにをいわれてもいくからな。」

宣言した。

「ふむ。譲る気はなさそうだな。」

弓弦は腕を組み、面白そうに零を見た。

そして、朔に呼びかける。

「よし、朔!」

「…はい?」

「お前、今から月夜のリーダーな。」  
間。



「————はあっ!？」

「うるせーな。零がやるって言ってんだ。零は月夜の鋼糸使いになる。」

「な、でも…!」

「でもじゃねーの。こいつが氷美を守る手だてはそれしかねえ。」

「教える人は…!」

「私。」

麗音の落ち着き払った声。

だいぶ落ち着いたのだろうか。

「でしょ?弓弦。」

「当たり前だ。」

どんどん進んでいく新・月夜の話に、朔は慌てた。

「あ、当たり前って…そんな、すぐ覚えられる訳じゃないんだし…!」

「大丈夫だろ。零は手先が器用だし、もちろん俺たちだってついてくさ。」

弓弦がにっと笑う。

朔の背を冷や汗がつつた。

「————月夜…大丈夫なんだろうかこんな調子で…零がたたと駆けてきて、弓弦の服の裾を引っ張る。」

「ゆづるおじさん…!」

「お?」

「ゆづるおじさんっていいやつだな!」

「…あー、まあ、な。」

歯切れの悪い声に、朔は笑いをこらえるのが精一杯だった。

**\*雪鶴語り〔過去?〕\* (後書き)**

雪鶴が語っている気がしないというツツコミはナシでお願いします。  
ちなみに、雪鶴は氷美と一緒にいますので。

## \*雪鶴語り「過去？」\*

「……………ふーん……………」

麗音は郵便受けの中に入っていた黒い便せんを見て涼やかに微笑した。

こんな不吉な手紙、一つしか考えられない。

「弓弦！招待状よ！」

「あ？招待状だ？」

弓弦がめんどくさそうにやってきた。

頬のあたりに何かの跡がついているところを見ると、どうやら寝起きらしい。

黒い便せんを見たたん、弓弦の瞳が陰しく細められる。

「まーだ準備の途中だったのに…気がはええな、あいつら。」

苦笑する。

弓弦の言った通りだ。

まだ、零も朔もちゃんとした動きさえできない。

これは、ベテランが行くしかないかもしれない。

\* \* \* \* \*

「零！朔！」

「ははうえ…なにかあったの？」

零はいつものまにか麗音よりも早起きになり、下手すると日の出の前から朔をたたき起こして修行している。

朔には迷惑をかけていると思うが、仕方ないと諦めているのかちゃんと付き合ってくれている。

大丈夫か聞いてみたところ、「彼も月夜の一人なので」と返された。目の下の隈がとても目立っていたから、ありがとうしか言えなかったけど。

「ね、零。もし氷美を助けに行くときに留守番するとしたら、  
「いやだ。」

まだ何も聞いていないというのに。

麗音はほとほと呆れた。

この頑固さは誰に似たんだろう。

「零くん。それでも、できないっていうことはあるんだよ？」  
朔が笑顔で諭す。

最近、朔はこうやって零を笑顔で諭すこととかが多くなったせいか、  
笑顔に凄みが増した気がする。

麗音や弓弦よりは凄みが足りないが、さらにメンバーが増えていく  
うちに成長するだろう。

「できないことがある…しってるけどさ。できないことなんて、い  
つかなくせるとおもうんだ。」

子供は純粹だ。

麗音の顔に黒笑が浮かぶ。

純粹で、頑固で。

話が進まないじゃないか。

つい、麗音はいらだててしまった。

「ねえ、零？」

「…は、ははうえ？」

麗音の異変に、零が怯えるように声をかける。

朔よりも凄みのある笑顔で、零の瞳に「恐怖」がありありと浮かん  
だ。

「できないことをなくす？へえ、そこまで言うんなら強くなった  
のよね？私とやって勝てるのよね？」

勝てるわけがない。

強くなった…微妙だ。鋼糸という物に、この間初めてふれたばっか  
りだ。

「ごごごめんなさい……………」

零は瞬時に理解した。

麗音だって、氷美を助けたい気持ちは一緒なのだ。

自分が強くなるのを待っていたら、年越しが三回ぐらい体験できそうだ。

人間死ぬ気になれば何でもできるとはいえ、無理がありすぎると言うことが身にしみてわかった。

と、いうわけで。

「兄さんと、麗音さんとで行く？」

朔が胡乱気にそう言った。

「そうだ。なんか意見でもあるか？」

偉そうに腕を組んだ弓弦が問う。

「意見というか：僕も行っていないんじゃないですか!？」

朔が声をわずかに荒げた。

僕、と自分のことを言うのは初めて聞いた。

いつもは私とっていたけれど、こっちが素ということか。

「お前もまだ未熟だろ。足手まといだ。来るな来るな！」

しっしつと追い払う仕草をする弓弦。

もっと嫌そうな顔をする朔。

「来るなって言われたって……」

「平気だ。雪鶴もいるしな」

「そういう問題じゃないでしょう！多くの人がいると想定できます。そこに2人で行くなど、死に行くようなものではないですか！」

「——うるせえよ。」

朔がはっとしたように口をつぐむ。

一瞬だけの、弓弦の本当の感情。そして、殺気。

朔が言いすぎたことを自覚して唇をかみしめると、弓弦は元に戻ったように笑った。

「平気だよ。そう簡単に負けないさ。」

でも、と言いたいような目をしている朔の額にデコピンをして、弓弦は側に置いてあった太刀を手にした。

「俺らがいないことを見越して、敵さんはこっちに刺客を送り込んでくるかもしれねえだろ。」

太刀を持っていない方の手で朔の頭をくしやりとなでる。

照れくさそうに頭を押さえる朔を見て、弓弦は可愛いやつだなあと  
思った。本人には言わないけれど。

「ありがとな、朔。」

「は？」

突然の感謝の言葉に朔が目を瞠る。

「心配してくれて、だよ。」

麗音が付け足した。

弓弦がきびすを返し、麗音も続く。

「かえってくるの、まってるからな！」

朔の足下にいる零が叫ぶのを聞いて、弓弦が片手をあげた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

一ヶ月くらいたって、零の手に鋼糸がなじんできた頃。

早朝。

もやの中に、着物を着た少女が見えた。

その隣には、右足を引きずるようにして歩いている女性。

その女性の腕には、零と同じぐらいの少女が抱きかかえられている。

朔と零は、その三人——雪鶴、麗音、そして氷美を見て、涙をこぼさんばかりに喜んだ。

記憶を失った氷美でも、氷美は氷美で。

ぼろぼろになって、さらに右足に怪我を負った麗音。

白と水色を混ぜたような着物：雪鶴の白慢の着物は、すこしだけ赤茶色のシミがあった。

こんな汚れすぐ落ちる、と笑った雪鶴の目は、潤んでいたように思える。

でもその喜びが過ぎた後には、静かな疑問が浮かぶ。

ただ一人、弓弦だけは帰ってこなかったのだ。

**\*雪鶴語り〔過去?〕\* (後書き)**

雪鶴語り編、これで終わりとなります！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3360z/>

---

狐の面は月見て笑う

2012年1月9日20時48分発行